高知県自然観察指導員連絡会会報

ネイチャー高知

No.65　2025年7月30日発行

8月以降の観察会のおしらせ

８月以降12月までに行う観察会の内容が決まりましたのでお知らせします。

横倉山交流観察会

自然観察指導員鳥取県連絡会と高知県自然観察指導員連絡会の会員相互の交流・親睦を図るとともに横倉山の植物に理解を深めるための会員限定の観察会です。

日時　2025年８月30日（土曜日）９時から15時（予定）
場所　越知町横倉山 午前９時に横倉山第３駐車場に集合
案内役　細川公子さん
持ってくるもの　筆記用具 あれば図鑑 昼食 飲み物 雨が降りそうな場合には雨具
その他 小雨決行です。夜は懇親会も予定しています。

秋の草原の植物観察会

日時 2025年９月13日(土曜日) 午前９時から12時（予定）
場所 高知市皿ヶ峰周辺 ９時に筆山第２駐車場（皿ヶ峰入口）に集合
講師 石川愼吾さん（高知大学名誉教授）
定員 ２０名（募集開始９月１日 締切り９月10日 定員になり次第締め切ります）
持ってくるもの メモ用具 あれば図鑑
その他 雨天中止です

タカの渡り観察会

日時　2025年９月27日（土曜日）　午前９時から11時30分までの間に集合
お昼には「しゃぶしゃぶランチ」を楽しむユニークな観察会（探鳥会）です。
詳細は３ページをご覧ください。

棚田の植物観察会

日時　2025年 10月 11日（土曜日）　午前９時から12時
場所　高知市 久礼野
講師　細川公子さん

蛇紋岩地の植物観察会

日時　2025年 11月22日（土曜日）午前９時から12時
場所：高知市 蓮台
講師：細川公子さん

冬の水鳥（カモ類）観察会

日時：2025年 12月 20日（土曜日）　午前９時から11時（予定）
場所：日高村 日下川調整池
講師：楠瀬雄三さん

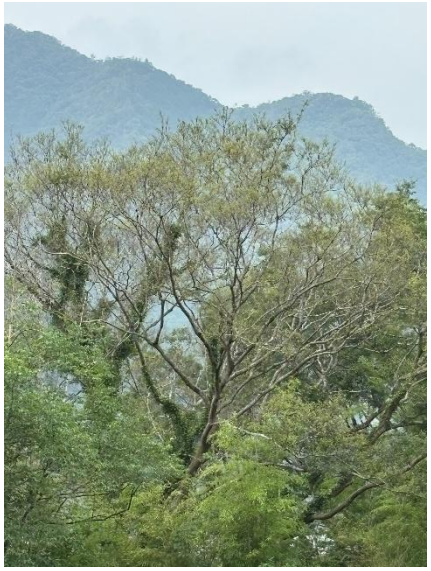
いずれの観察会も事前の参加申し込みが必要です。参加を希望される方は事務局までご連絡ください。

私のフィールドノート　四万十川河川敷に異変

田城　光子

去年から今年の春にかけて、野山をあちこち歩きながら違和感を覚えることがいろいろあった。タンポポの花の咲き方が、例年とは少し違っていた。いつもなら 12 月には咲き始めるシロバナタンポポがなかなか咲かず、春になり暖かくなると、黄色い外来のタンポポとほぼ同じ時期に一斉に開花した。そしてあっという間に花が終わってしまった。樹に咲く花も、いつもと違う咲き方をした。サクラの仲間も、まずヤマザクラが咲き、そのあとでソメイヨシノが咲くのが普通だったが、今年は開花時期にあまり差がなかった。

四万十川の景観にも、ずいぶん変化があった。河川敷に生える大きなエノキが、初夏を迎えて葉っぱが無くなり、丸裸で枯れたように見える。５月中旬に西土佐方面に行き、気が付いた。原因はテングチョウの大発生である。20 年ほど前にも、一度同じ光景を見た。その後、丸裸のエノキを見た記憶がないので、何年か何十年かに一度発生する蝶なのだろう。西土佐の道の駅の駐車場からちらほら飛び始めて、半家の沈下橋を渡り、牛鬼の納められた神社前にくると、停めた車のまわりに真黒くなるほど集まってきた。以前の大発生時は、車の走行を邪魔するほど飛んでいたが、それに比べるとやや少ない。この時は、四万十川下流域に近いあたりのエノキに食害が見られた。しかしその後枯れたエノキを見たことは無い。少し時期が進んでまた新しい芽が出た。テングチョウのほうも、一度の大発生でエノキを枯らしてしまえば、次の発生時に食料がなくなって困るだろうから、食べ方の工夫など、そこらへんのことは考えているはずだ。



葉がほとんど落ちてしまったエノキ（上）とテングチョウ
（写真撮影：廣瀬奈美）

テングチョウは小さな蝶で、頭の先が長く突き出ていて、それが天狗の鼻のように見えるのが名の由来だそうだ。蝶にはアサギマダラなどのように優雅な飛翔を見せるものや、ジャコウアゲハのような美しい蝶もいるが、テングチョウはまるで枯れ葉色、ちぎれた落ち葉が風に吹き飛ばされてでもいるかのような飛び方で、水のある所や車のまわりなどに群がる。ヒッチコックの映画「鳥」ほどの恐怖感はないが、不気味ではある。

四万十川流域で気になるのは、それだけではない。枯れた竹藪がめだつようになったことである。数年前からあちこちで竹に花が咲き始めた。早く開花した竹藪は、もう完全に枯れてしまっているが、花が終わってあまりたっていない竹藪、これから咲き始めている所など、少しずつ開花時期が異なるが、次々に場所を変えて同じ現象が起きている。西土佐岩間の沈下橋付近のハチクと同定した竹藪のタケは、花が終わり未熟な種子らしきものが観察できた。結実率はよいのか？発芽率はどうなのか？120 年に一度の開花といわれ

開花にともない枯れたハチク林（左）と花序（写真撮影：廣瀬奈美）

るので、この状況を観察できることはたいへん運が良いことだ。「種子が熟して採集できたら、蒔いて芽の出るのを観察したい。自分の時間では終わらないので、子から孫にも伝えて観察していこうか？」とつぶやく人もいた。壮大な研究になるなあ・・・とわたしはワクワクしながら聞いた。

今年は大好きなハチクの筍があまり店先に出なかった。えんどう豆と煮て食べるのがこの時期の楽しみなのだが。これまでに四万十川沿いで、マダケの開花も確認した。しばらくはこれらの筍を食べられないのが残念である。

****

タカの渡り観察会

秋のタカの渡りを観察します。南に渡るサシバやハチクマを探しましょう。

日時　2025年9月27日（土曜日）　午前9時から11時30分までの間に集合

場所　越知町 横倉山「織田公園展望台」
　　地図は　https://maps.app.goo.gl/skJAro7sjeWsA6G78

講師　細川公子さん

持ってくるもの　帽子、筆記用具、あれば図鑑、観察用具等
※双眼鏡を持参すること。持ってない方は細川さんが準備するので申し込みの時にその旨依頼すること。

その他　雨天中止です
　　お昼にしゃぶしゃぶランチを用意します。ご飯類は各自お持ちください。参加費500円です。

参加締切りは9月24日

（準備の都合がありますので、必ず事前の申し込みをお願いします）

高知県へびしらべはじまりました！

谷岡　仁

はじめまして。今年からこの連絡会に参加させていただくことになりました、谷岡仁（たにおか ひとし）と申します。香美市土佐山田町に住んで15年ほどになります。

約20年前に県外で暮らしていた頃、日本自然保護協会（NACS-J）の自然観察指導員になりました。そして昨年、他の地域の連絡会で活動している知人から勧められ、このたび入会することになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

高知では、自然観察の指導活動はあまり多くは行っていませんが、ときどき野鳥やヤモリ、ヘビ、コウモリなど、小さな動物たちの観察会で講師をつとめています。

普段の生活の中では、見かけた野鳥や小動物の記録を、少しずつ残すようにしています。これは「オカレンスデータ（occurrence data）」と呼ばれるもので、「いつ・どこで・どんな生き物が見られたか」という証拠として、将来その生き物の分布を調べるのに役立ちます。ちょうど、ある時点の自然の様子を記録したスナップ写真のようなものです。

自然の環境は、時間がたつにつれて変わっていきます。たとえば、昔と今で同じ場所に同じ生き物がいるかどうかを比べたいと思っても、高知では野鳥についてはいくらか記録がありますが、多くの動物については、比べられるような具体的な情報がほとんど残されていません。

「この年、この場所に、この生き物がいた」というような情報を残していくことは、将来、地域の自然を守るためにきっと役に立つと考えています。

この６月から、四国自然史科学研究センターによる市民参加型の調査「高知県へびしらべ」が始まりました。私は、この調査でヘビの確認などで協力しています。

高知県には、海にすむウミヘビを除くと８種類のヘビが生息しています。この調査では、一般の皆さんにヘビの写真を投稿していただいたり、見つけた脱皮殻（ぬけがら）を送っていただいたりして、県内にどんなヘビがどこにいるのか、その分布情報を一気に集めようという試みです。

ちょうど2025年は「巳年（みどし）」――ヘビの年でもあります。この年の自然の姿を“スナップショット”として記録しようという、意欲的な取り組みです。

見かけることが少ないタカチホヘビ。高知県では海岸付近から山地上部の森林にいます。ミミズを食べる個性的なヘビです。

ヘビは、昔から人の暮らしのそばにいた生き物です。ネズミなどの害獣を食べることから「豊作の象徴」とされ、脱皮する姿から「再生」や「健康」の象徴とも考えられてきました。また、たくさん子どもを産むことから「多産の神」ともされてきました。そんなヘビは、誰もが名前を知っている身近な生き物ですが、実際の自然の中での姿や暮らしぶりについては、意外と知られていません。特に高知では、毒をもつハミ・ハメ（マムシ）への警戒心からか、「ヘビを見たらすぐに殺す」といった厳しい対応をされることもあります。でも、ヘビには種類ごとに特徴があり、よく見るとどれも魅力的な生き物です。

この「へびしらべ」がきっかけとなって、少しでも多くの方が野生動物としてのヘビの存在に興味を持ち、ひいては身近な自然への関心が広がっていくことを願っています。

【高知県へびしらべ 2025】

高知県内のどんなところに、どんなヘビが生息しているのか？調べています。ヘビを見かけたり、死体を見つけたら写真を撮って投稿してください。いきもの調査は見つけた日と場所が大事です。そのような情報も教えてくださいね！四国自然史科学研究センターのホームページに投稿フォームがありますので、そこから送ってください（ https://lutra.jp/高知県へビしらべ/ ）。生体でも死体でも構いません。毒をもっているヘビもいますので生きているヘビには近づきすぎないように！遠くからの写真でもOKです。

また、抜け殻を見つけたら封筒に入れて送ってください。ヘビの抜け殻を送ってくれる方はホームページから調査用紙をダウンロードしてください。調査用紙は折りたたむと封筒になり、抜け殻を入れて郵送していただけます。

投稿フォームが開けない方は sion.lutra@gmail.com に写真を添付して送ってください。

高知県へびしらべ 2025 へのリンク

自然観察　川で遊び学び教室

常石　勝

子どもの頃の感動体験は、脳内に刷り込まれているのか幾つになっても鮮明に思い出されます。その一つが、川の生き物たちとの出会いふれあいです。

川は身近な水族館。今年も国分川と羽根川で、生き物の命の鼓動にふれあう活動（環境学習）のお手伝いをさせていただきました。近日中にあと２回ほど物部川にて実践予定です。

さて、「高知（常石）流の幸せのかたち　豊かさ」って何でしょう。漁を楽しみ、自分で獲った魚をその場で料理して食べる。家に持ち帰って、自然の恩恵に感謝しながらみんなで分かち合って命をいただく。素直に「いただきます」「ごちそうさま」の言葉が出てくる。そんな環境条件の整った郷土が、身近にあることではないでしょうか。

自慢できる自然がある。「気づいてほしい、ふるさとのすばらしさを・・・」そんな思いで続けてきたのが、川での遊び学びの教室です。

まわりの自然に無頓着なままで大人になってほしくない。郷里を愛し、環境悪化を憂い、自然保護・清流保全を心底願う人間もいないといけない。

子ども達の縦型社会が担ってきた自然との接し方や危険予知能力等の総合力の育成機関は、遠い昔に途切れてしまい、残念ながら修復不能です。

“このままやったらいかん。何とかせなぁいかん。環境保全意識の芽生えの一助になるようなことを…”そんな信念めいた熱意というか使命感に駆られ、賛同していただける方々と共に動きはじめ、今に至っています。

内容的にはアクティビティを二三組み合わせ、活動を通して自然への愛着が芽生え、出会い！ふれあい！再発見！想い出に残る楽しい経験になるよう努めています。

最初の安全教室では、水中メガネの曇り止めに使うヨモギやイタドリの葉っぱは奨励し、このタデの葉っぱはひりひりして肌が痛うなるし、まけるきん、絶対使われんで・・・からはじめ、ライフジャケット装着（股紐固定）、シュノーケルの使い方、疲れん浮かび方（仰向けになり手足をちょっとだけ動かす泳ぎ方、パニック厳禁＝心の持ち様）を教え、練習してもらいます。

その前後には、事前にサンプリングし、セッティングしたミニ水族館で魚族への興味をそそらせ、それから川流れ⇒エビ玉漁等へと活動展開させています。

過去をさかのぼれば、皆様に紹介したい出来事は盛り沢山ですが、例えば、今年の羽根川は特にアユの魚影が濃く、縄張りを主張するアユや目の前でアユの群れがコケを一斉に食む光景が観察できるなど幾つもの感動（興奮シーン）を共有できました。また、アユカケ（カマキリ）を捕まえた生徒がいて、ミニ水族館閉館の際は、エビやゴリ類はお持ち帰りのため氷締めしましたが、レアーなアユカケは、本人の申し出もあり、皆で相談の上リリースしました。

「川面を上から眺めても、生き物は見えないけど、実際に川の中を水中メガネで覗けば、いっぱいお魚たちがくらしていることを知り驚いた。」と初めて潜った４年生たちの感想。

「去年は怖さが勝って川流れできなかったけど、今年はできました。」と自分が成長したことを発表した５年生。それは勇気の醸成にも寄与した証拠です。

「今年はエビ玉でゴリもエビもいっぱい捕まえることができました。」と漁のコツをつかみ、楽しさを覚え歓ぶ生徒たち。

みんなそれぞれが、自分の成長を実感し、自信へとつながる一歩になったのではないでしょうか。何人かは夏休みに家族で、戯れにくる感じです。

魚族の棲みかである石をはぐる行為によって、水生昆虫が下へ流されます。漁に夢中になっている子どもたちに時折話しかけるのは、「ちょっと後ろを振り向いてみいや、イダやハヤの子が“餌を流いてくれて、ありがとう”言ゆうでぇ～」です。魚たちがトビゲラやカワゲラをよろこんで食べゆう光景。それは生で食物連鎖を実感してもらう格好の教材です。

自然とふれあうきっかけとしては、川流れや川漁体験だけでも十分ですが、もう少し深掘りというか川全体を捉えていただくためにオリジナルの自然観察フィールドビンゴも楽しんでいただいています。

どんなものかと言うと、本日のスペシャルを含め、頭より大きな石、川がつくる白色、コケの生えた石、水生昆虫（石の表面を這う昆虫、石と石の間に巣を作って棲む昆虫）、黄紋のある魚、雲の流れ、川のにおい、川の音のほか“不思議な銀色”など、25項目の探し物をしてもらう、どちらかと言うとちょっと勉強色の強いアクティビティです。

参考となるヒントも軽く伝え、グループでたんね調べし、発見したことをみんなで共有。最後は全員でわかちあいをします。

特に“不思議な銀色”は外しません。見つかったかぇ？　イワシやカツオ、サバのお腹の色は何色？　何で白銀色（鉛色）なが？　よう見つけんかったグループは、水中から水面を見上げてみいや、銀色に輝きゆうろぅ？　目立つ色やったら大きな魚に“パクッ”と食われるきんねぇ。鳥に食われんよう背の色も腹回りも保護色言うて、外敵に見つかりにくいようにカムフラージュして自分を守りゆうがよ。　そんな会話を大事にしています。

ゴリたちの吸盤、モクズガニの雌雄や遊泳肢、ヤマトテナガエビとテナガエビの違い、抱卵した雌のエビ、発達した触覚、脱皮殻、羽化殻、時には産み付けられた卵や伏流水など、川には探究心、興味をそそる素材が満載です。

海とのつながりが絶たれない限り、大抵そこには両側回遊魚が生息し、その生活史を通して生命の不思議、生き抜く力などを伝えることができます。

会員のみなさま、是非魅力いっぱいの川を覗いてみて下さい。

長文となりましたが、昔カッパがちびっこカッパを育てる活動も高齢の波に抗えず、瀕死の状態です。ひょっと会員の皆様の中に「わしで・あたしで良かったら仲間入りするでぇ」という方がいらっしゃればご連絡ください。

お邪魔しました。

気ままなカメラ日記

久川　信子

今回から、いつものカメラ日記に戻しますがこの上半期、サシバ観察に里山に通う日々でしたので、引き続きその舞台となった身近な自然でのお話になります。どうぞ、のんびりとお付き合いいただけましたら幸いです。

３月28日㈮

前日の雨がまるで春の目覚ましだったのか、それまで静まり返っていた田んぼで、カエルたちの大合唱が始まりました。自然はほんの少しの変化で、がらりと表情を変えます。そんな春の息吹を感じながら囲む食卓には、海釣りが趣味の主人が釣り上げたばかりの、オオモンハタのアクアパッツァと甘鯛の松笠揚げがならびます。

その美味しい魚も、山の恵みがあってこそ。山に降った雨が、土の豊かな養分をたっぷりと海へ運び、今時期だとそれが産卵を控えた魚たちを育む。家族で海の恵みは、豊かな山に支えられているという自然のサイクルの話をしながらいただきます。そこで気づき自慢！

「雨といえば！小雨の日は魚の警戒心が薄れるのか、よく釣れることもある！」と主人。

「雨だと油断して鳥も出てくるのよ！」と負けじと私�笑。田んぼから出てくるタマシギを思い出しました。

そんなこんなで、山と海それぞれが好きな私たちですが、食卓でいただく命を通じて、その大切なつながりを改めて実感します。

この素晴らしい恵みが未来にもありますように。

６月27日㈮

毎年、ヒメボタルの観察を続けています。教材写真として蛹の写真だけが不足していたため、昨年まではオスとメスの成虫を各１匹捕獲して育てていました。（捕獲は市に届出を行っています。）今年の５月11日、ようやく蛹の撮影に成功しました。そのため、今年はメスを探す必要がありませんでしたが、この日は少し気になる状況がありました。

毎年、メスを探すのには大変苦労していました。繁殖期の後半になると、オスばかりが残り、メスを捕獲するのは非常に難しく困ったものでした。しかし、この日は明らかにメスの光が多く見られたのです。「仕方ない！」と草むらに入って確認したところ、捕まえたのはやはりメスばかりでした。さらに、今年はオスの飛翔距離が非常に短いように感じていました。繁殖期後半にメスが多い状況は、繁殖がうまく進んでいるのか気になるところです。ヒメボタルはデリケートな生き物で、湿度が低いと活動が減少しがちです。高温すぎる場合も、飛翔が抑えられることがあります。逆に、湿度が高く適度な気温だと、活発に飛び回る姿を見ることができます。湿度や温度のバランスが、ヒメボタルにとって重要な条件なのですが、来年はどうだろうか？気になったので書き留めました。

朝倉城山の植物　ムラサキニガナ

坂本　彰

ムラサキニガナは低山から山地にかけての林縁に多く、城山でも山腹のスギ林を横切る農道脇に見ることができる。ただ、花の色も地味で華やかさはなく、しかも少しずつ順に開花するので、気にかける人は少ないようだ。

ムラサキニガナ 花期の終盤で多くの花が綿毛の状態になっている

「〇〇ニガナ」と名前の付く植物は結構多い。本家は頭に何もつけない「ニガナ（苦菜）」だろう。今回対象としたムラサキニガナ（紫苦菜）は、花の色が紫に由来する名前であることは容易に推測できる。ただ、よくよく観察してみると、花の色は紫というより桃色に近い。紫以外にも、ウスベニニガナ（薄紅苦菜）、シロバナニガナ（白花苦菜）がある。また生えている場所を頭に付けたものとしてはノニガナ（野苦菜）、ハマニガナ（浜苦菜）、イワニガナ（岩苦菜）、ヤマニガナ（山苦菜）がある。これらが分類学的にはニガナ属、ノニガナ属、アキノノゲシ属、ムラサキニガナ属、ウスベニニガナ属に分かれており、大変ややこしい。

ムラサキニガナもややこしい植物である。高知県植物誌（2009年発行）ではムラサキニガナは、花柄に腺毛がないムラサキニガナ *Lactuca sororia* Miq. var. *soronia* と腺毛がある変種ケムラサキニガナ　*L. sororia* Miq. var. *pilipes* (Migo) Kitam.　に区分されていた。ところが2017年に発行された平凡社の新しい図鑑では、頭花の花柄にある腺毛は個体変異で、ムラサキニガナとケムラサキニガナは区別する必要はないとされ、学名もそれまでのアキノノゲシ属から、新たに設けられたムラサキニガナ属として *Paraprenanthes sororia* (Miq.) C.Shih が採用されている。花柄に腺毛が有る・無いといったことは、市民感覚としては些末なことであるが、植物分類学的にはそうでもなく、腺毛や毛の有無によって、変種などに区分されることは少なくない。近年の傾向としては、細かく分ける方向に動いているように理解していたが、今回の区別不要論は、その流れに逆らうような説で、その根拠は腺毛の有無は個体変異だという。

ムラサキニガナ　頭花（左）と花序の枝の腺毛

区分しない考えには賛成だが、個体変異だということには疑問を感じ、集団単位で腺毛の有無を調べてみることとした。城山では２個体の集団と５個体の二つの集団が確認されたが、２ 個体の集団はいずれも腺毛がなく、５個体の集団は５個体とも腺毛があり、集団によって分かれた。また高知市の南嶺の山腹、南国市の里山でも確認したが、集団によって腺毛の有る・無しが偏っており、個体変異とは言えないという感触を得た。ただ調査データがあまりにも少なく、個体変異か遺伝的に固定された形質かについては、さらに多くのデータをとってみないと結論は出ない。来年の開花期に、もう少し調査範囲を広げて調査してみようと考えている。

高知の植物化石（6）

私の名前が付いた球果類

三本　健二

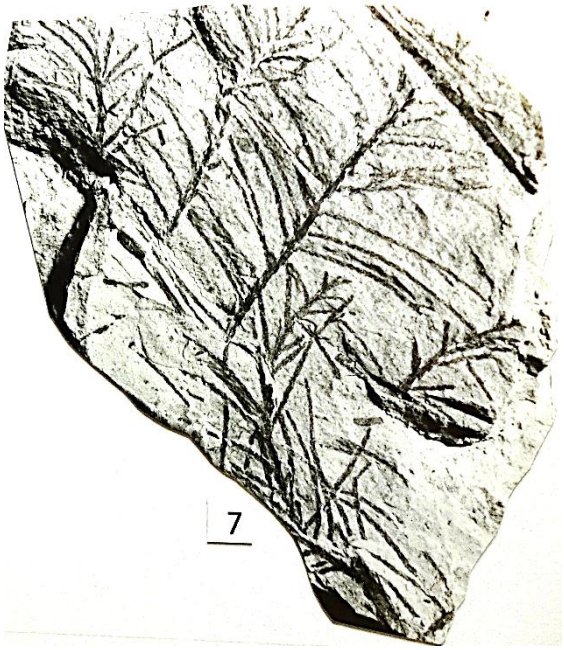
私の名前が付いた化石植物が一つある。キュプレシノクラドス・ミモトイ *Cupressinocladus mimtoi* という。

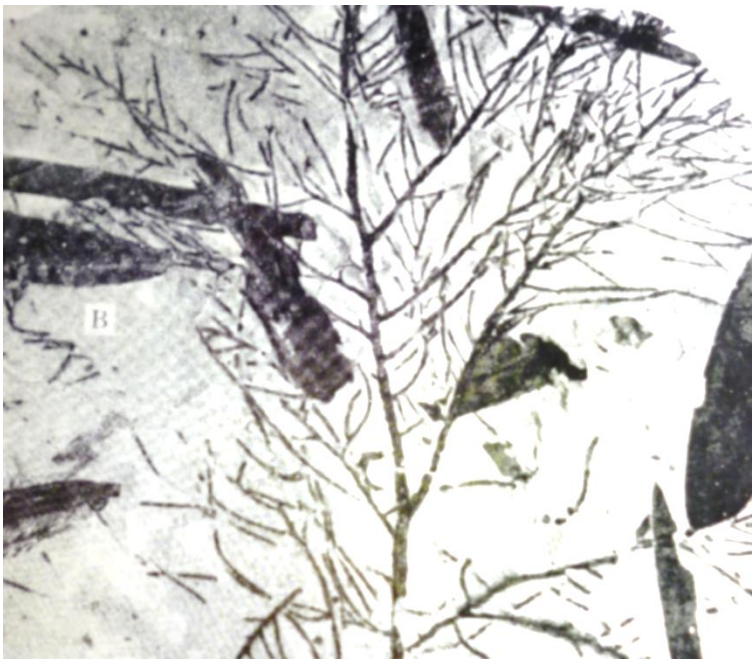
40 年ほど前，高知化石研究会で「高知の化石」を編集しているとき，不明な植物化石の写真を東京学芸大学の木村達明教授に送って問い合わせた。すると，未記載種だと判明した。「高知の化石」は 1986 年に刊行し，新種発表はその翌年に行われた。

発見した場所は，高知市福井町の鴻ノ森南麓。産出層は，白亜紀前期の約１億 3000 万年前の長柴層という。高知市円行寺地区の南端にある地名にちなんで命名された地層だ。

キュプレシノクラドスは，ヒノキのような枝条葉。属名はヒノキ科のイトスギ属 *Cupressus* が基になってはいるが，所属不明の球果類だ。東北から九州にかけての太平洋側のジュラ紀後期～白亜紀前期の地層から数種が知られていた。私が発見したものはそれらと異なるため新種とされた。

高知市で発見したのはただ１個の化石だったが，南国市領石で 1987 年に植物化石が多産した時には，類似の枝条葉がいくらでも見つかった。それらは同種とされ，あまりにも多いので，その化石を見つけると，「またミモトイか」とまで言われた。





キュプレシノクラドス・ミモトイ

右の図は下記の文献から引用

Ohana, T., Kimura, T. & Kawazoe, A. 1989. Some fossil plants newly found from the Lower Cretaceous of Kochi Prefecture, in the Outer Zone of Japan. Asian Journal of Plant Science, 1(2): 53-68.

高知県自然観察指導員連絡会　WEB 情報

HP

観察会の予定や実施状況などをHP で情報提供しています。URL は次のとおりです。今年度から変更になっていますので、ご留意ください。
検索する場合は「nature kochi」で検索してください。
　　https://nature-kochi.com/

機関誌の閲覧

機関誌は、以前発行したものに個人情報が含まれているため、会員だけの利用になっています。
利用にあたってはID とパスワードが必要です。ID は n-kochi　　パスワードは nature365 です。１９８９年８月発行のネイチャー高知 第１号から現在のものまですべてをご覧いただけます。

掲示板

各種催し物の紹介や面白い自然のできごとなどを広く紹介する場として掲示板を設けています。会員以外の方も利用も可能ですので、広く知らせたい場合にご利用ください。
URL は　https://rara.jp/nature-kochi/　です。

LINE

会員相互の情報交換の場として開設しています。基本的には、会員どうしの情報交換の場ですが、観察会の開催情報なども提供しています。
現在２４名のメンバーで運用中です。参加を希望される方は、下の QR コードからグループへの参加手続きをしてください。
参加は、高知県自然観察指導員連絡会の会員に限られます。

参加の際、簡単な自己紹介を書いていただくとお互いに親しみがわくのではと考えます。また、ニックネームで参加される方がおられますが、誰なのかわかりにくいので、できるだけ本人だと確認できる名前で参加してください。

もしうまくいかないときなどは連絡会世話人甲藤紀夫さん（携帯 090-1320-7113
Mail：n.kattoh@gmail.com までご連絡ください。

【会員入会・退会情報】

新入会者　　谷岡仁さん（香美市）　久保尚文さん（高知市）

会費納入のお願い

高知県自然観察指導員連絡会の会計年度は１月１日から12月31日まで、会費は年額1,000円です。

納入方法は郵便振替が便利ですので、郵便局備え付けの振替用紙を利用して、振込みをお願いします。（ゆうちょ銀行に口座をお持ちの方は口座振替も利用できます）

郵便振替の振込口座番号は　01630-9-41422

加入者名は　　高知県自然観察指導員連絡会　　です

※振込料金の負担を避けるため、観察会に参加の方については、事務局で預かって会計担当者に渡すようにしています。直接会う機会のない方については、ご負担をかけますが、振込での納入をお願いいたします。

ネイチャー高知　原稿募集

機関誌ネイチャー高知は１月・７月の年２回発行しています。自然観察記録、エッセー、自然保護の問題提起、観察フィールドの紹介など、高知県の自然に関する原稿をお待ちしています。編集作業をする上では、電子データがありがたいですが、手書きの原稿でも結構です。

締切りは2026年１月25日を予定しております。

【編集後記】

例年より３週間も早い梅雨明けに、人間だけでなく自然界の生き物も戸惑っているように見受けます。これまで最も早かったのは１９６４年の7月1日、あの東京オリンピックが開催された年で、60年以上も前のことになります。今後も高温が続くと予想されており、暑くて長い夏になりそうですが、暑さに慣れることができるでしょうか？

今回は連載記事を書いていただいている方に加え、谷岡仁さんと常石勝さんに投稿いただきました。谷岡さんには「高知県へびしらべ2025」を紹介していただきました。私は強度のヘビ恐怖症で、道端のホースや朽ち縄がヘビに見えて、足がすくむことはしょっちゅうです。人間は生まれつきヘビに恐怖心を持っているとの学説もあるようですが、ヘビ恐怖症克服のために、ヘビ調べに挑戦しています。おかげで、ヘビの写真もあまりドキドキせずに見ることができるようになりました。ヘビが苦手な方、一緒に挑戦してみましょう。

「ネイチャー高知」高知県自然観察指導員連絡会会報

No.65　2025年7月30日発行

事務局　780-8075
高知市朝倉南町３-51-1　坂本彰　方
TEL＆FAX　088-850-0102
E-Mail　s-akira@mvd.biglobe.ne.jp